

【12 有明フェリー Ariake Ferry】



多比良港沖の船上から

有明フェリーでは、多比良港～長洲港の航路上のあらゆる区間から“北面～北東面の雲仙岳”が眺望できます。フェリーの屋上部には展望スペースがあり、ここから眺める360度の有明海のパノラマは絶景です。(新船“有明きぼう”の屋上部には、長崎県立国見高校の美術部の生徒が描いたイラスト(↑)が花を添えています。)航路からは阿蘇山も眺望できることがあり、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

本航路は、国道389号線の一部に位置づけられていますが、国道389号線は、雲仙天草国立公園を縦貫する道路で、大牟田市～長洲～島原半島～天草下島～長島～阿久根市と4県(福岡・熊本・長崎・鹿児島)をつなぐ道路です。この道路の通過市町村のうち、阿久根市以外はすべて雲仙岳が眺望できる市町村であり、ドライブしながら山の多様な表情を楽しむことができます。

平安時代初期(713年以降)に編纂された肥前国風土記において、長渚濱(長洲浜)を訪れた景行天皇(第12代)が対岸の雲仙岳をご覧になり、“あの山は島か半島か？私は知りたい。”と仰せになり、臣下を派遣して確認させたとの逸話が記されていますが、それを追体験できる航路と言えます。また、明治40年に西九州を周遊し、紀行文“五足の靴”を執筆した与謝野鉄幹や北原白秋ら5名の詩人は、島原港から長洲港へ小型汽船で渡る際に雲仙岳を眺め、「高く仰げば温泉ヶ嶽は、大いなる母の如く聳(そび)えて居る。」と表現しており、同じように追体験できます。

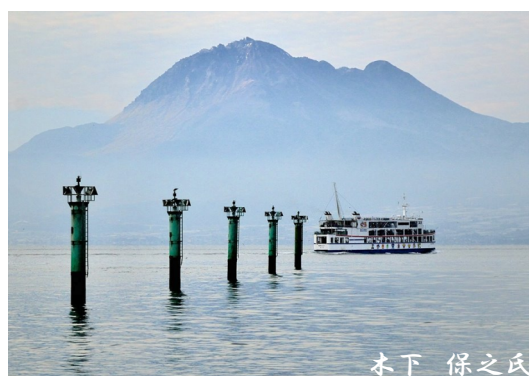
本航路では、↑の写真にも描かれたイルカの一種“スナメリ”が多く見られます。スナメリは、全国各地の干潟があるような浅い海に生息していて、有明海・橘湾では約3000頭が季節的に回遊しながら生息しているとされますが、波の静かな日にはフェリーから5～10頭のスナメリを発見できます。スナメリも多く生息する有明海の干潟は、全国一の規模を誇りますが、その泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を筑後川や菊池川、白川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、有明フェリーで旅してみませんか？

●有明フェリーの情報はこちら ⇒ 有明海自動車航送船組合 <http://www.ariake-ferry.com/>



長洲港フェリーターミナルから



長洲港から